近江の懐をめぐる 4

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員
石川　亮

近江の懐をめぐる 4

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員　石川　亮

Name:

Ryo　ISHIKAWA

Title:

Omi's "futokoro": Part four

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine topics such as "techniques" and their "spirit" in order to answer the questions, "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懐」とは「命の水の周辺にある暮らしの中から活きづく生業（なりわい）」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当てている。主に近江（滋賀県）の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを心がけている。

四回目となる「近江の懐をめぐる」は二〇一九年の暮れ、冬の中山道沿いの近江商人発祥の地の一つとしてあげられる東近江市五個荘、中でも最大の集落である宮荘の取材から始まる。年が明け二〇二〇年二月上旬にもう一度この地を訪れた時は既にマスクを装着していたことを覚えている。私は取材をする中で現地人と会い、対話することを心がけている。それは自身が感じたその地の魅力や気づきに対し、現地人の見え方、感じ方を聞き出すことにある。例えば現地で長年受け継がれてきた「モノ」や「行事」に出会った時、その意味や理由を知として捉える以上に、何か独特の不思議さ、奇妙さ、滑稽さとでも言おうか、そんな感覚が伝わってくる。それらはあたかも唯一無二の彫刻のように見え、それは地域で長年育まれてきた感覚と捉えている。

しかし、二月上旬の取材を境に二〇二〇年は現地人と会うことが困難になった。この文書をまとめている二〇二一年一月時点で、新型コロナウイルス拡大の三波が迫り、二〇二〇年の四月に緊急事態宣言が出されて以降、首都圏や都市圏において二度目の宣言が発出されている状況である。

新型コロナウイルス感染症が全世界を覆い、その脅威から行動自粛をせざるを得なくなった。当然、「近江の懐めぐり」は困難になる。それだけでは無い。私が勤務する大学の授業においても四月五月は休講、六月から感染リスクを避けたオンライン授業を行うなど、これまでに経験したことのない事態となった。七月に入ってからマスク装着、手指消毒を徹底し、密閉、密集、密接といわゆる「三密」を避ける生活が始まる。手探りではあるが、漸く近場からのフィールドワークから始めることになり、地域実践領域一年生の演習授業では大学の近隣である「仰木」に入ることができた。その間、パンデミックの経験のない我々は自宅に篭る生活が続く。これほどまでもの長期間、自宅に居続けることが困難であることも身にしみて経験することになった。「仰木の里（一九九〇年代から宅地開発が始まった仰木の東側に広がる新興住宅地）」に居住する私は四月二日から六月十日までのほぼ毎日、仰木への散歩を始め、カメラを持参して思うがままに、目の前に映る風景や事物を撮影した。それは今後の行く末が予測しきれない歯痒さと、自身の日々の心境の変化を

記録することにある。十週間にわたる記録から毎日の散歩で通い続けた仰木の拠り所「小椋神社」その参道に位置する「山地神社」は、私のモヤモヤする気持ちを落ち着かせ、自分自身と向き合う時間となった。その拠り所を「仰木の杜」と題し、近江の懐めぐりをすることによって自身の精神の「回復」から始めることにした。

七月に入って様々な地域から集まった学生と一緒に歩き出した仰木のフィールドワークにおいては、対面できることの喜びと、仰木の晴れ渡る空と風景が精神の「回復」へと導いてくれたのではないかと考えていている。

コロナ禍以前の暮らし最後の取材となった「五個荘の宮荘」と、コロナ禍になって「自身で見つめる仰木」と「学生と共に見つめる仰木」の三つの懐を紹介したい。

一、宮荘（みやしょう）の普段着

二〇一九年の冬、ここ数年、年の瀬にフィールドワークをすることが恒例となっている。それは師走の繁忙期から、一瞬解放され、多くは郷里の実家に戻る時間である。一年の溜まった汚れを落とし、新しい年を迎える準備は、自身を見つめ直し、冷静さを取り戻す時間と言ってよいだろう。そのような時間に、私は家の大掃除を一旦中止して「近江の懐」に潜り込むのが好きだ。日常からハレの日へ、少しずつ変化していく近江を見るのは、普段、気にも留めなかったことがあらわになってくる。今回は「懐の横綱」ともいうべき、街道（中山道）から少しはずれた街、五個荘を訪れた。

五個荘は言うまでもないが、近江商人発祥の地の一つとして有名である。今日も商人屋敷を残す街並みは、その景観が保たれ、中でも金堂地区は、重要伝統的建造物群保存地区に指定（平成十年十二月二十五日）されている。これまでに数回訪れ、そこで感じる五個荘の街並みの印象は、それぞれの集落の中心に杜（神社）があり、それを囲むようにして街が形成されている様にみえている。以前湧水探索（鳥戸霊泉／齢仙寺）で訪問した中地区は、小幡神社。学生と街並み紹介の映像制作で訪れた金堂地区は大城神社があり、今回訪れた宮荘地区も中心に五箇神社が鎮座している（写真1）。古代条里制が残っており、碁盤の目に沿う形の街並みは、どこの集落も景色が似ている印象だ。次に五個荘の名前であるが、鳥羽院政期（一一二九～一一五六）、繖山東麓にあった荘園「山前（やままえ）荘」が「山前五個荘」と称されたことに由来する。その主要な五つの荘園の一つ、北荘が現在の宮荘付近である。

この日は能登川から県道五十二号を南東方向へ進み、途中で直角に右折して、五個荘の集落に入った。五箇神社の西側を通り過ぎる頃、角地の仏閣で大人が数人、暮れの大掃除をしているのが見えた。チラッと覗くと石仏が目に入り、思わず足を止めてしまった。すると「良かったら中へ」と声をかけていただいた。早速、「懐へ」と思い、お邪魔すると、堂内には上宮太子（聖徳太子）の作と言われる木彫座像の大日如来と石仏立像阿弥陀三尊と地蔵菩薩が安置され、地域信仰の拠り所となっている（写真2）。煤払いが終わり、正月飾りが施される際のひと時に長年この地域のお世話をされてきた五箇神社氏子総代長の高田勇（たかだいさむ）さんにお話を伺うと、ここは寶光庵（ほうこうあん）、通称大日堂と呼ばれているとのこと（写真3）。神仏分離の頃、五箇神社の本地仏と言われる像を隣接地に移動させる必要があり、明治二十二年（一八八九）現在地に移築されたと伝わっているそうだ。地元の人々によってこれまでの信仰、拠り所として何ら変わらず、大事に思う気持ちが今日も、受け継がれていることに気付かされる。仏前で合掌して帰途の用意をしていると、高田さんの差し出した一枚の写真が目に入った。それは毎年四月の第二日曜日に行われる五箇祭、例大祭日の大神輿を担ぐ場面である（写真4）。その神輿は周囲の景色と比較してかなり大きく見え、たくさんの大人が担いでいるのがわかる。聞くと日本最大級の大神輿と呼ばれており、長さ八・四五メートル、高さ三・八メートル、嘉永四年（一八五一）着工して六年の歳月をかけ、安政四年（一八五七）に完成したとされる。担ぎ手は八十人以上必要とあり、並々ならぬ大きさであることがわかる。そこで私は担ぎ手が着ている衣装に着目した。近江でよく目にする神輿の担ぎ手の衣装は、上半身は腹巻に法被、下半身は半股と足袋姿で、全て白に統一されている。私の地元で行う仰木祭では、それに豆鉢巻や赤、青、黄などの鉢巻を

頭や首元、足首に巻いて派手に見せている。さらに仰木は中世に祭の起源をたどることから、役職につく人は素襖（室町期の武家装束、江戸中期は下級武士の礼装）を着用している。また裃着用は近江の祭りで目にすることが多い。高田さんに衣装のことを聞くと「これは近江商人の行商に行く時の服です。」と返事が返ってきた。上半身は紺色の羽織に腰巻、下半身は白い股引に紺色の脚絆を巻き、草鞋を履いている。「みんなが持っている揃いの服で、普段着です。」と付け加えられた（写真5）。祭の話をする高田さんは誇らしく、年に一度の例大祭はハレの日であり、この日の為に日々があることが伝わってきた。私はこのような慣習を受け継ぐ伝統と精神を本当に羨ましく思う。その日は帰途につく、ガチャコン電車の異名を持つ近江鉄道に五箇荘駅から乗車し、暮れゆく東近江を車窓より眺めつつ、一旦、懐から抜け出た。

ひと月ほどして、高田さんと連絡を取ることができた。その日は暖冬が続く中で、目の覚めるような寒波が押し寄せ、東近江一帯は白い風景に様変わりしていた。再び大日堂にあげてもらい、合掌した後、祭装束を見せていただいた。それは先代から引き継がれて、現在も息子さんが使用する現役の近江商人の「行商の姿」である。同席していただいた長年、地域振興に努めてこられた諏訪一男さんの話では「行商から戻って、祭りで神輿を担ぎ、終わると、そのまま行商に出たんですわ！」と、羽織の細部を見ていると手縫いであることがわかる。脚絆も今日では揃えるのが難しいようだ。このようにモノが伝えるリアリティーにこそ、歴史を伝える説得力を感じる。五箇の名は「五穀に恵まれない土地」から始まり、五箇神社は「五箇の森」と呼ばれており、ここに地名の起源があるとも伝わっている（写真6）。明治五年に北ノ荘村から宮荘村に改称され、五個荘町宮荘となった。平成十七年の大合併時に、自治会の合議制により宮荘は五個荘の名をつけない事とし、今日に至っている。

なお、宮荘の歴史詳細は諏訪氏からの聞き取りと、開設するホームページが参考となっている。さらに、二〇一三年に『先人・悠久のあゆみ宮荘町歴史（誌）年表』の発刊、二〇一八年には、四年の歳月をかけ五箇神社の歴史をまとめた歴史誌『鎮守の神様　五箇神社の歴史（誌）と宝物』共に諏訪氏の編集により発刊されている（写真7）。神社に保管されていた千冊以上に及ぶ古文書と資料をまとめ編集されており、懐の奥深さに圧倒される。

石仏がチラッと見えたことから祭衣装に転じ、深い懐にどっぷりと浸かってしまった。

高田、諏訪両氏には、この地の起源から、古代条里制、水争いの記録、学校教育、祭りなど、その詳細に至る様々なお話をしていただいた(写真8)。「五穀に恵まれない土地」から行商に出て、街道を行き来する。生身で世相を感じ、時の政に翻弄されない、自前の判断で暮らしを持続する態度こそ、近江人の姿ではないだろうか。この普段着はそのことを切に伝えている。

写真 1 五箇神社

写真 3 寶光庵、通称大日堂

写真 5 五箇祭の祭衣装（宮荘の普段着）

写真 2 大日堂の石仏

写真 4 五箇祭にて神輿を担ぐ様子

写真 6 国道八号線より「五箇の森」を望む

写真7
左：「先人・悠久のあゆみ宮荘町歴史（誌）年表」
右：歴史誌「鎮守の神様　五箇神社の歴史（誌）と宝物」

写真8 宮荘の人
（右：高田勇さん、左：諏訪一男さん）

二、仰木の杜

不要不急の外出自粛が叫ばれる緊急事態宣言が全国に発出されたのは二〇二〇年四月十六日からである。四月一日に新入生を迎えるはずの、私が勤務する成安造形大学の入学式も中止となり、先のみえない、相手のみえない格闘の時間が始まった。

その翌日四月二日から始めていることがある。それは自身の体力維持として課していた散歩である。自宅のある「仰木の里」から一二〇〇年以上の歴史があるとされる集落「仰木」への周回だ。地域のよりどころである「小椋神社」を参拝し、仰木峠から続く比叡山の山容を仰ぎ見て、棚田の脇道を下りつつ琵琶湖を眺め、対岸にそびえる三上山を確認して、帰途につくコースである。四月二日からカメラを片手に持ち、気になるものが目に入ると、とにかく撮影することに決めた。それはいつも見ている同じ風景が、何か違う様に見える気がしたからである。また刻一刻と社会状況が変化する中、自身のモヤモヤする気持ちや言葉で表せない心境、感覚を何らかの方法で記録する必要があると考えたからである。

更に、この文章はそれから約一ヶ月経った五月三日に記すことにした。それは小椋神社例祭、泥田祭（仰木祭）の本祭当日であり、五基の神輿が集落を練り回る。それは仰木の集落が一年で一番エネルギーを放つハレの日に他ならないからである。

二〇二〇年の当日、いつも通りの周回コースの散歩に出た。例祭は神事のみが執り行われたらしく、いつもと変わりない穏やかな仰木の風景がそこにあり、例年の賑わいはなかった。私が決まって祭りを堪能する場所があるのだが、今年も行ってみた。それは小椋神社から参道を通って一の鳥居までの間に、奥宮である滝壺神社へ向かう闇龗神参道と交差する場所がある。その角地にひっそりと佇む小さな杜の辺りがその場所だ。いつもみている田園風景にポツリと浮かぶ小さな杜、山地神社を紹介したい（写真9・10）。

杜の敷地は、十メートル四方あろうか、そこに数本の木々が祠を覆い囲む様にあり、小椋神社参道に面して石の鳥居が建っている。中を覗くと小さな祠と青々と茂る苔庭をみることができる（写真11）。周囲にはお地蔵さんが並び、いつも野花が添えられる何とも愛らしい杜、祭神は弁内侍である。新修大津市史によると、弁内侍は、似絵の名手藤原信実の娘で、鎌倉時代中期の女流歌人とある。後深草天皇（在位一二四六～五九年）の側近の女官（内侍）として仕え、正元元年（一二五九）天皇の譲位とともに職を退き、文永二年（一二六五）妹の死にあって出家した。その後、父と姉とも死別し、仰木の山里で静かに晩年を送ったといわれている。

長年、この杜の守りをしてきた伊藤士良さんにお話を伺うことができた（写真12）。地元ではこの杜を「針の宮（針殿）」「ツ〇ボの宮」と呼んでいるそうだ。針の宮は弁内侍が針仕事に長けていたといわれ、仏道修行のため仏像を刺繍していたと伝わっている。杜の前の坂道（小椋神社参道）はハンドロ坂と呼ばれ、針殿坂がなまったと考えられる（写真13・14）。次にツ〇ボの宮であるが、これは局の宮がなまったか、あるいは弁内侍が仏道修行に没頭するあまり、村人が何か言い寄っても聞く耳を持たなかったと推測することもできる。「今ではそんなふうに呼ぶ人も減ってしもたけどなあ…。」と伊藤さん。「この裏手に笄塚があるんやけどな！」と、集落から農地へ抜ける小道の途中にそれは存在する（写真15）。「これも山地神社と地続きなんや」と話された。笄塚は弁内侍が櫛や笄を埋めたとされ、毎

年三月十五日に内侍を供養する祭りが地元の方々によって行われているとのこと、更に針供養もあり、使えなくなった針を蒟蒻に刺して祀られるそうだ。供養の時こそ、柔らかいところに刺して祀るのであろうか、日吉大社で料理人によって執り行う包丁祭のことを思い出した。ここでも人々の暮らし、生業を支える道具への「畏敬の念」が、弁内侍の伝承を通して今日も持続されているのであろう。

さて、山地神社の名称についてであるがその詳細はわからない。伊藤さんが山地神社のお世話をする様になったのは戦後、杜の隣地に住むことになってからのことだそうだ。それまでは藪が生茂る杜であり、笄塚と山地神社は小道で繋がっていた様だ。またその路は奥宮の滝壺神社へと通じる参道であり、豊かな水を仰木に注ぐ谷筋の水路と並行しているのである。そのことから推察すると奥宮へ続く山路、山地と里宮（小椋神社）の参道が交わり、この角地が奥宮を指し示す場として、この名が付いたのではないかと考えることができる（写真16）。

仰木は奈良期、大津遷都の際に伽太夫仙人が開村した伝承に始まり、平安期には清和源氏の礎、多田満仲を摂津国より迎え入れた伝承がある。それらは仰木祭りを通して後世に受け継がれてきた。集落の存続は絶えず客人を招き入れ、少しずつ変化しながら経済、文化を持続してきたのだ。

今、世界で起こっていることを俯瞰することは困難を極める。資本主義競争を激走してきた社会は、今こそ自国を優位にするのではなく、分かち合い、カバーしあう考え方が、必要とされているのではないだろうか。それを本来共存し、いつの時代も絶えず横にいたはずの存在（疫病）が教えてくれたと考えてはどうだろうか。いつの間にか我々が外部にしてしまっていたこれらと共に生きていくべきなのかもしれない。

親しみを込めた名前で呼ばれてきた「仰木の杜」はそのことを伝えている。

写真 9 仰木の杜「山地神社」1

写真 10 仰木の杜「山地神社」2

写真 11 山地神社の鳥居と祠

写真 12 伊藤士良さん（山地神社の前にて）

三、仰木の学生

二〇二〇年五月二十日から漸くスタートすることのできた前期授業は八月五日を最終日として無事終えることができた。この様な「無事終えること…」といった感じになったことは恐らく初めてであろう。五月の終わりまではオンライン授業、六月に入って対面授業を恐る恐る始め、七月からは地域実践領域一年演習授業のメインであるフィールドワーク授業に入った。

写真 13 ハンドロ坂（小椋神社参道）

写真 15 農地へと抜ける道沿いにある笄塚

写真 14 ハンドロ坂より山地神社を望む（奥：小椋神社鳥居）

写真 16 小椋神社参道と奥宮への参道がポイント（右が山地神社）

「三密」を避けることの困難さは現在も日々奮闘中であるが、この「新しい生活様式」にいち早く慣れることに舵を切った。毎朝の検温と携帯用消毒スプレーを常時所持すること、マスクの着用は当然であるが普段の自分の行動を記録することで自身を管理していく。また危険を感じたら躊躇なくオンライン授業に戻し、コミュニケーションが継続できる状況をつくること、それが我々のフィールドワーク研究持続であり、「新しい生活様式」なのだ。

七月に入って本来なら四月下旬から進める大学の近隣「仰木」フィールドワーク授業を始めることができた。ここでの目的は地域を知ることから、その魅力を見つけ出し発表することにある。学生達はこれまでのオンライン授業にて、自身の地元の魅力、気付きの紹介を試みてきた。ここで同じ志を持つ学生と対面し、リアルな体験が始まっていく。そこで彼らが目にした魅力や気付き、新たに感じた自身のことを書き記したいと思う。

七月一日、梅雨に入り予期せぬ集中豪雨が続く最中、この日は快晴である。グループを分けながら、前述した私が毎日行く仰木周回コースを歩いた。新興住宅地の仰木の里から仰木へと抜ける棚田が広がる場所では、「やっと始まった！」などの言葉が自然と学生から溢れ出た。小椋神社では年に二回、六月の終わりと大晦日に執り行う「茅の輪くぐり」を目にする。初耳の学生、初めて目にする学生に対し、「茅」がしめ縄に使われること、神聖なイメージがあり、無病息災、疫病退散を祈願する意を伝え、八の字を描く様にくぐり抜けることなどを伝えると、即、列を組みながら「祓いの儀」が始まった。例年の四月授業では味わえない光景である（写真17）。

次に「仰木」の暮らしを少し体験するため、上仰木に位置する上坂達雄（こうさかたつお）さん宅に向かう。ここでは例年、農村の暮らし、比叡山との関係、信仰、年中行事、祭りなどの話を聴きながら「出会いと学び」のスタートを祈念する「ハレノヒ料理」を振る舞ってもらい、食と暮らし、信仰が一体となっていることを、洗礼を受けるかの如く、体験を通して学んでいる。「納豆餅」「鮒鮨」「鳥すき焼き（四つ足の動物を殺生しない）」を皆で囲みながら学生の出身地との違いを話し合う時間になるのであるが、今年は自粛せざるを得なかった。代わりに上坂さんから「納豆餅と草餅」をお土産として用意していただいた（写真18）。

さてここからは、四週間に渡って「地域の気付きと魅力探し」の中から学生が見つけ出した魅力を紹介したい。

・仰木の坂道（写真19）

仰木は馬の背と呼ばれる尾根道添いに向かい合う様に集落が立ち並んでいる。その尾根道から南側の斜面を降りると、地形に従う様に路地道（坂道）が幾重にも絡み合っている。岡山出身の学生は坂道の景観で有名な尾道と比較しながら、暮らしと共にある仰木の坂道に着目した。年季の入った鉄製の手すりや坂道の景観を形成する石垣にも注目しながら遠くに見える琵琶湖、開けた空のその光景の魅力に取り憑かれている。

・謎の神社（写真20・21）

沖縄出身の学生はあちらこちらにある小さな神社や祠の多さに驚きを隠せない様だ。地図に記載されていない稲荷、弁天、地蔵など神仏問わず様々な地域の拠り所に気付いた。稲荷や弁天が祀られる意味と地域の生業との関係を見ながら、祠の横に石で彫刻された由緒書に気付き、次への問いを自ら導き出している。

・くねくね道とまっすぐ道（写真22・23）

社会人としての生活に区切りをつけ、地域へ眼差しを向けることから学び直す学生は、くねくねと棚田に沿って曲がる道と谷間の田畑を貫く一本のまっすぐな道に気付く。現地の人に声をかけ聞き取りをすると、前者は祭りの還御道、後者は圃場整備によって出来た道であることを知る。同じ田畑の景観から対象的な風景に着目し、その意味や背景を知る。

・郵便ポストと繋がり（写真24）

高知出身の学生は平尾地区の日常の暮らしに焦点を当てる。道沿いの綺麗に整えられた生垣に心奪われつつもキチンと据えられた赤い郵便ポストを発見する。一見静かな風景に感じるが郵便ポストに回覧

板が入っていることから地域の人たちのつながりを想像し、ご近所付き合いのある温かみを魅力として表現している。

・覗く学生（六躰地蔵尊）（写真25）

比叡山の麓、上仰木の集落が終わるところに六躰地蔵尊のお堂がある。恵心僧都源信作と伝わる六体の地蔵を掘り込んだ石仏がお堂の中に鎮座している。お堂の隙間から同行した学生がそれを見ている様子。しばらくすると目が暗さに慣れてきたのか？「真ん中に阿弥陀さんがおるで！」と気付く、その真剣に確認する眼差しを少し離れた位置から捉える滋賀県水口出身の学生。

彼らは、対面授業ができる喜びを噛みしめつつ、はじめて出会い、これからの学びの同志でありライバルになるであろう相手と新しい土地でのフィールドワークに取り組んだ。それぞれ別々の場所から同じ目的で集まり、仰木を歩くことから学びが始まっている。コロナ禍を正面から経験し、大きく変わりゆく社会、地域、自身のあり方に向き合いながら新しい生き方を導き出していくのだ。

写真 17 小椋神社にて茅の輪くぐりをする学生

写真 18 上坂達雄さん宅で仰木の暮らしについて学ぶ

写真 20 謎の神社

写真 22 くねくね道とまっすぐ道 1

写真 19 仰木の坂道

写真 21 謎の神社と由緒書

写真 23 くねくね道とまっすぐ道 2

最終日のプレゼンテーションは再びオンラインの授業となったが、そこで自らの意見を発表する彼らは「仰木の学生」になっていた。

写真24 郵便ポストと繋がり(実際は回覧板が入っている。)

写真 25 覗く学生（六躰地蔵尊、実際は格子戸に顔をつけている。）

追記

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に〝近江の懐〟と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につなげる新たなる価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二一年一月現在まで十五回の連載が継続されており、二〇二〇年一月より二〇二〇年八月まで（二〇二〇年十月は休み）の第十三回から第十五回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

紀要の冒頭は、二〇二〇年全世界に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響下で私自身がその瞬間に感じ取り、行動に起こした記録をできる限りの冷

静さを保ちながら書き記した。

コロナ禍の生活が手探りで始まりながらも自身の感染に対する不安は現在も払拭できない状況である。また自身が行動することで他者への感染を広げるかもしれない不安もある。様々な工夫をしながらの生活が始まった中、自身が始めたことを一つ紹介しておきたい。それは二〇一七年頃から少しずつ始めていたロードバイクでめぐるフィールドワークである。琵琶湖を擁する近江（滋賀県）は昨今「ビワイチ」と称して、自転車で琵琶湖を一周する試みが盛んになってきている。行動自粛をせざるを得なくなり、人との接触を極力抑えたい状況下において、ロードバイクに乗ることはそのストレスを解消させてくれる。以前にも増して自身の健康管理に対する意識は高まり日頃からの体調コントロールは欠かせないものなっている。例えば毎朝の検温の習慣がついたことで、平熱がどれくらいあるのかを知ることになった。春の緊急事態宣言下で散歩が日課になったことから毎日身体を動かす習慣がついてきている。その延長でロードバイクに乗ってサイクリングする習慣につながってきたかもしれない。毎日二十分の仰木周回コースから一時間の湖西地域周回コースになり、登れなかった坂道が登れるようになる。同時に心拍数に気を配るようになり、効率良いケイデンス（一分間のクランク回転数）を一定にキープできるようになってきた。そして持久力を高めることで免疫力が高まり自身の体力も安定に繋がるとイメージしている。何より自身のエネルギーとペースで、活動や行動を起こす表現の原点に立ち返っている様に思えるのだ。コロナ禍は感染の恐怖のみならず自身を見つめ直すことに繋がっている。反面これまで大切にしてきた対話でのコミュニケーションがやりづらくなった。マスクをしていない人、大声で楽しげにおしゃべりする人などを見かけるとつい注意したくなるのは私だけであろうか？　これまでなんとも思わなかったことに対し敏感に反応してしまう様になった。そして感染状況が収まらないことに対し、他の誰かを矛先にしようとはしていないだろうか？　二〇二〇年の「近江の懐めぐり」は制限されたことによってそのことに気付かさせてくれている。

そして「近江の懐」は人間が肉体と精神のバランスを「回復」していこうとする姿を注視している様に思う。

編集後記

一年前の前号の編集後記で、新型コロナウイルスの流行のニュースが連日報道されていることを書いていました。今も状況は好転することなく、日々、グラフや映像で視覚化された目に見えないものの脅威に対して新しい生活様式を実践しながらコロナ後の未来を模索しています。人との距離をとり、マスクで表情も読み取りにくい、それだけでも日常の暮らしやハレの日、お祭りや行事に多大な影響があります。この一年間は日常を自粛し、ハレの日の多くが縮小や中止となりました。日本の文化が凝縮され継承されてきたハレの日の「かたち」や暮らしの「かたち」、「ハレとケ」のありようが今後どのように変わっていくのか大変気がかりです。

本紀要では客員研究員と本学研究員からの論考三編を掲載します。

髙梨客員研究員からは、愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告を寄稿していただきました。加藤研究員の論考は、大津市真野北村地区に今も続く庚申講の調査について、庚申信仰と三井寺や大津絵との関わりなどにも触れ、地縁のコミュニティの意義を考察しています。石川研究員は、東近江市五個荘の宮荘の取材と大学近郊の大津市仰木の取材および学生との活動について「近江の懐をめぐる4」というかたちで紹介しています。近江学の講座はこの一年間すべて中止となったため、「講座の報告」はありません。

編集担当　永江弘之

成安造形大学附属近江学研究所
紀要　第10号

発行日　令和3年3月25日
発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学
附属近江学研究所
〒520-0248
滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話　077-574-2118
発行者　小嵜善通
編　集　成安造形大学附属近江学研究所
印刷所　株式会社 北斗プリント社

© Seian University of Art and Design 2021
ISSN 2435-4279